

●路地に入り扉より見ゆる新緑の木々のひとと山法師の花

市川茂子

一連タイトルは「マスク」で、歌もこの間のもの。巣ごもりと云っても出入りはあり、そういうことも含めてこの間の歌。山法師は、春先の花が一巡したあとで出てくる花という理解がある。白花（見えているのは総苞片）だが、そういうこともあって目に立つ。街路樹にもつかわれるが、ここでは路地からの扉越し（とみた）の花。枝先にかたまつて花の数がある。消毒スプレーやマスク、あるいはテレビをみているしかない、そういうなかでの花。路地や扉越し、というやや窮屈な位置から、ということにもある種時間感覚があるかもしれない。新緑の木々のひとと、と丁寧に云っている。

知り合いにマスク作りを頼まれぬ持参の布の見する人柄

四首目で初めて出てきたマスク。人間関係もあるが、作者の日頃の仕事のこともある。そのうえで、人柄もみえるという。そのあと次第に夏マスクとか、話題になってくるマスクがある。そういう歌もある。事のある日々、そのなかで成りたてている生活である。

さまざまな形のマスクする人らテレビに映るをじっと見ている

●身に覚えなきまま呼ばれる「ひいばあちゃん」代理を付けて先づは諾ふ

河村郁子

家族関係のなかでの呼称。それで身に覚えなき、か。みずから代理を付けて、呼ばれることを諾うことにした。「ひいばあちゃん」と曾孫が一家のなかで呼び合われるということはもうないか、少ないかもしれない。勢いのある一連の歌のなかで、そういう関係も覚悟を決めて受け入れている作者像が浮かぶ。令和元年十一月に生まれた甥の長男の曾祖母役（となること）、それも同じ年三月に逝った五歳上の姉の代役だということは、号末の短信でしれる。ウイズコロナの時代である。

曾孫の名は寛翔かんとなり エマニエルとミドルネームに付けたくなりぬ

これにもひいおばあちゃんの心躍りのようなものが出ています。口を出している訳ではなくて、感想。旅好き、英語に関係する仕事をしていた作者でもあるが、エマニエル・カント（ドイツ語の名前）、は（当時プロイセン王国の）哲学者。説明が要る名前ではない。

●これ以降われ一人にて片づけむ写真の母はふつくらとして

布宮慈子

これ以降のこれ、は二人の叔母さんと呼んで、形見分けをしたことか。一連タイトル「遺品整理」は母の家のことで、そこでいろいろ思い出すことになる。写真の母もあらためてみているところ。赤きパスポートというのが出てきて、こんな歌。そこから香港の旅が取り出された。まことなり、がなんだかい。

片づけも、母と娘のことでもある。

香港に行つたといふはまことなり母の赤きパスポート出で来

離り住むころは知らざる好物の赤飯供ふ遺影の前に

何が好物かは家族でも知らないことが多い。

空間のあれば物あり田舎家に付きある小屋は魑魅魍魎ぞ

納屋のようなところ、物置小屋のようなところ、いずれもスペースそのものになる。昔からの家に付随する空間でもある。何か長すぎる経過のもの。これには身につまされるところがある。向きあって、向きあい切れないような驚き。

## 前号作品短評B 〈慈子〉

●身の丈にあった大きさ鯉のぼり風あれば吹かれベランダにあり

小野澤繁雄

分相応の大きさの鯉のぼりがベランダにあつて、風が吹けば小さく泳ぐのが見える。身の丈は、背の高さ、身長のことだが、やはり昨年の「身の丈発言」を思い出す。新聞の社説から引用する。

教育行政の理念に関わる問題と捉えねばならない。来年度から始まる大学入学共通テストの英語民間検定試験について、萩生田光一文部科学相が「自分の身の丈に合わせて勝負してもらえれば」と発言し、撤回に追い込まれた。(中略)問題はまず、新制度が受験生の格差を拡大しかねないことを事実上容認している点だ。(中略)より深刻なのは、萩生田氏が教育基本法の定める「教育の機会均等」を理解していないことだ。(中略)これらの不公平をなくするのが教育行政の役割のはずだ。「身の丈に合わせて」と言うのは開き直りに等しい。(二〇一九年十月三十日、毎日新聞)。

その後、学校側や生徒が新制度に対する不信感を声に出し、世論も後押しして、政府は事実上、英語の

民間検定試験を引つ込めざるを得なくなった。歌がそこを意図していたかどうかはともかく、長年、大学の図書館に勤務していた作者の頭にあつたのは確かだろう。近隣住民の鯉のぼりの大きさをあらわすことで、わずかにチクリとやったわけである。淡々と詠っていることにも注目したい。

少年と父ともサイクリストか連休の初日朝を緑道にみる

題は「公園」。サイクリストは、自転車乗り、サイクリングをする人。埼玉県中部の町に住む作者だが、ずいぶん広い公園のようだ。このときの連休はゴールデンウィーク。春の連休はサイクリングをするのにいい季節。特にことしはコロナ禍もあり、遠出は控えたのかもしれない。緑道に見える自転車の家族が現代を写している。

次の歌も関連している。

みちなりにバラバラときて沼のべに一家族なる後尾お兄ちゃん

道なりにバラバラと来て沼のほとりに一家族が集まった。いちばん後ろはお兄ちゃんだ。お母さんは明示されていないが、おそらく家族は四人。「少年」「お兄ちゃん」の表現が一首を軽くし、親しみを感じさせる。

●えぞにうやコロナ禍といえうつむかず

新野祐子

「磐梯山山行五句」の最後の句。調べてみると、「えぞにう」は「蝦夷にう」で、読みはエゾニユウとある。

晩夏の季語。エゾは北海道、ニユウはアイヌ語で茎に甘みがあることによる。セリ科の多年草で、中部地方以北の本州、北海道の山野に自生する。茎は中空で直立して、七〜九月に傘状の小さな白い花が集まって開く。五〜六月ごろに若い茎を山菜として採るが、クマも大好物なのでクマ被害防止対策は必須。秋田では、ニョウサク、サク、ニオなどと呼ばれ、塩蔵して冬に食べる越冬山菜の代表だそうだ。山形で群生した花を見たことはあるが、自分は食べたことはないと思う。

写真を見ると、花は草丈が高く伸びた上に「うつむかず」に咲いている。コロナ禍でも植物は相変わらず元気だ。